

魔城の乙女

グウィノール年代記3

縞田理理
Riri Shimada

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 黒葉.K
地図 神北恵太

A decorative rectangular border with ornate floral and leaf patterns at the top, bottom, and sides, framing the central text.

❁ 目 次 ❁

プロローグ 9

1 章 13

2 章 54

3 章 107

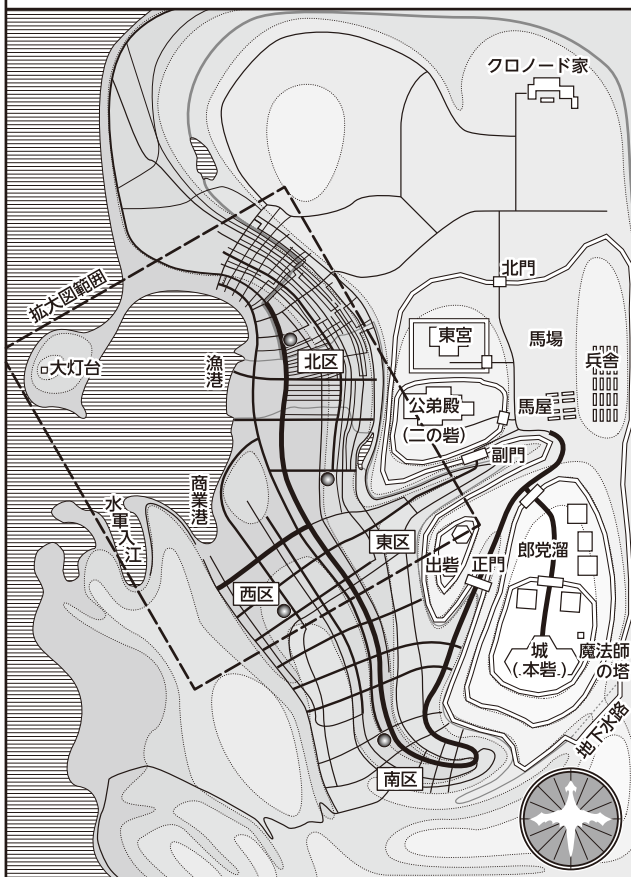
4 章 156

5 章 203

エピローグ 237

あとがき 248

ダルモリカ公国首都 シャナキヤスケル市街図



シャナキヤスケルは港を中心とした商業の街。城は入江を望む小高い丘の上にある。けわしい崖と周囲にめぐらされた城壁に守られ、街から城に入れるのは隣り合った谷を通り正門と副門に至る二本の道のみ。門への道沿いと、北門外の丘陵地帯は、大貴族の邸宅がならぶ。

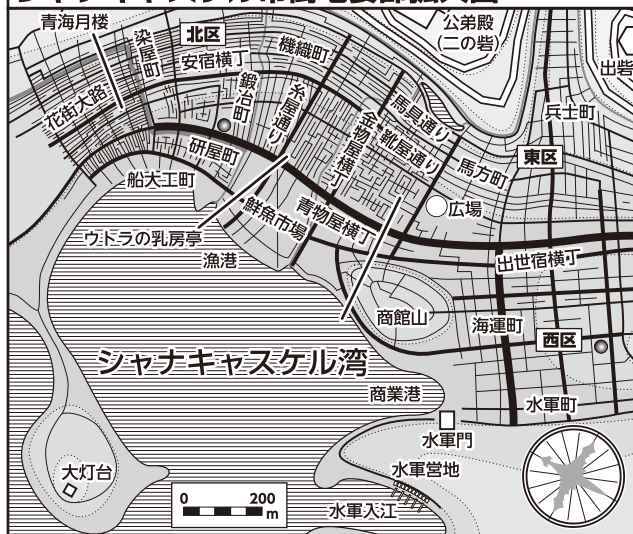
0 200 400 600 800 1000 m

● 崎端審問所

□ 城塞

飛竜方儀は、太陽の方向、南から飛び出した飛竜が真北を向いて飛ぶ姿から、北を指し示す。

シャナキヤスケル市街地要部拡大図



グウィノール大陸全図



登場人物紹介

- メル……………下町育ちの少女。《呪肉》憑き
- アラストリナ・ハイマナシー…ダルモリカ公国大公一族の娘。変わり者で有名。《呪肉》憑き
- オルウィナ・クロノード……………ダルシベラの母。大公の実姉
- ダルシベラ・クロノード……………アラストリナの従姉。カシェンドン公国へ嫁ぐ
- ブリュール・ゼクサウア三世…カシェンドン公国大公
- シュピール・ゼクサウア……………カシェンドン公国公子。ダルシベラの夫
- ブリュニエ・ゼクサウア……………カシェンドン大公ブリュールの末娘
- トレガー・ディオレイド……………代筆屋。メルの読み書きの先生
- ガウアー……………《遺物捜し》。帝国の呪いに取り憑かれている
- ローム……………《青海月楼》の楼主。《呪肉》憑き
- イスラ……………《青海月楼》一の売れっ^こ妓。《呪肉》憑き
- ソール……………イドローンに棲む青年
- イーアイ……………イドローンに棲む少年。《帝国の裔》
- 《おふくろさま》……………イドローンをとりしきる存在
- スイヴナ……………魔法師
- ルシアス……………吟遊詩人
- パーシュタン……………魔法師

魔城の乙女

グウイノール年代記3

——戻つて来よ。

草になつて。鹿になつて。人になつて——



プロローグ



真つ赤に熟れた太陽がグウィノールの西の地平に
溶け落ち、寡婦のヴェールを思わせる闇がひたひた
と帝都を包んでいく。

帝都イドローンは昼間はその美の半分しか発揮し
ていない。夜ともなれば消えることのない灯が無数
に鑲められた宝石のように眩く輝き、光と闇が鮮や
かにイドローンの街並を染め分ける。

この国の内情と同じだ、とユールは思った。

一万年の永きに互って栄えるグウィノール帝国は
二つの色に塗り分けられている。支配者たる真性グ
ウィノール人と、その奴隷である人間。

人間であつてもユールは帝国の賓客として丁寧
な供応を受けているが、それは自分が異国人であり、
ヨグムント王国の王弟であるからに過ぎない。

ここではユール自身には何の価値もない。この国
では真性グウィノール人でなければ人ではないのだ。
ユールは岩山を背に扇のように広がるイドローン
の街並の、ちょうど扇の要に当たる小さな広場へと
出た。広場の中心には見上げるほどに高い塔が天を
突いて聳えている。

《目の塔》だ。

砂色の塔に黒々と描かれた巨大な目の徴が威圧す
るようにイドローンの街を見下ろしている。

頭の中で声が聴こえた。

(……ユール。今なら見咎められずに入れるわ)

ユールはごくりと唾を呑んだ。

常日頃、厳重な警備が敷かれている《目の塔》の
周囲には一人の豪士の姿も見当たらない。近づくと、
継ぎ目のないように見える滑らかな塔の表面に一本

の細い筋すじが生まれ、ぐにやりと左右に開いて紡錘形ぼうすいけいの入り口となった。

本当に入れるのか……。

空恐ろしくなった。

だが、ここまで来て引き返せない。そんなことをしたらアアニヤに嫌きらわれてしまう。アアニヤに嫌われるくらいなら死んだ方がましだ。

ユールは紡錘形の入り口に足を踏み入れ、弾力を帯びた塔の内壁に手を触れながらぐるぐると螺旋階段らせんかいだんを登り始めた。消えることのない魔法の灯火とうちが檸檬色もんいろにゆらめいて彼自身の長い影を刻む。

(そうよ……そのまま進んで……ユール……ここなら絶対に見咎められないわ。今夜はわたくしの当たり番ですもの……)

頭の中の声に励はげまされてユールは長い螺旋を登った。最上階まで登りつめ、鉛細工あめを思わせる透かし格子すかしの向こうに愛しい人の姿を認めたユールの心臓は、破れ鐘やがねのように激しく高鳴った。

「アアニヤ！ 逢いたかった……！」

「わたくしも、ユール！」

裳裾もすそを翻ひるがえしてアアニヤが走り寄る。

「アアニヤ……綺麗だ……」

その白い小さな手を取り、しなやかな指先の桜貝のような六つの爪すべてに口づけする。

真性グウィノール人のアアニヤは、まるで幼い少女のように見える。

その背丈は、ユールの胸までもない。

その肌は、故郷の雪のように白い。

ユールはそれ以上彼女に触れることを躊躇ためらった。

自分の武骨な手であまりにも華奢きゃしゃなその身体からだに触れることは冒瀆ぼうとくのように思えた。

白い小さな美しい顔が上向き、深淵しんえんの闇を湛たえた二つの瞳ひとみが自分を見つめた。

「ユール。わたくしを抱くのが怖い？」

これは、許されない恋だ。

帝国人——真性グウィノール人——の男は気が向

けば人間の女を弄ぶ。年若い人間の女を取つ換え引つ換え玩具おもちゃにしている帝国人も知っている。快樂のためばかりではない。眞性帝国人は滅多に子宝に恵まれないゆえ、人間の女に帝国の血を引く子を生ませることは奨励しょうれいされている。

だが、逆は大罪だ。

合意の上であろうとなかろうと、人間の男が帝国人の女と情を通じたことが知ればその男は極刑を免れぬ。異国生まれの自分は詳しく知らぬが、帝国人の女に手を出した男に下されるのは死より恐ろしい劫罰きうばつだという。人間の男が帝国人の女を愛したければ、露呈ろうていしたとき即座に死ぬるよう準備をしておくことが肝要だという。

「罰など怖くはない。だが俺の手は大きい。君を壊してしまふのが怖い」

アアニヤの細い繊細な手が自分のごつごつとした拳こぶしにそつと添えられる。

「わたくしは壊れたりしないわ。だって、この手は

愛しいあなたの手なのだから」

「アアニヤ……!」

か細い身体を両腕いっぱいに掻き抱く。艶つややかな白金の髪が鳴り、白糸の滝のように豊かに指の間をこぼれ落ちる。

「皆、わたくしを恐れているわ……わたくしには分かる……あなただけ、あなただけなの……」

「俺もだ。俺の愛する人は君だけだ」

アアニヤは《眼の乙女》おとめ、他の追隨ついでを許さない魔力により魔法大陸グウィノール全土の力ある乙女たちの中から選び抜かれた最高位の《乙女》だった。その力はグウィノール皇帝すらも凌ぐ。だから帝国人はみなアアニヤを——《眼の乙女》を恐れるのだ。けれど異国人のユールにとって、そんなことはどうでもよかった。ユールにとってアアニヤは誰より可憐で、誰よりも可愛い女だった。

ユールは小さな白い貝殻のような耳にそつと唇を寄せた。

「なんて綺麗なんだ……愛しいアアニャ……この夜が永遠に終わらなければいい……」

「大丈夫。愛しい人、時間はたつぷりあるわ。今宵、イドローンのすべての《眼》は閉ざされ、全ての《耳》は塞がれている……この街に、わたくしたちを視る者は誰ひとりいないのよ……」

それはアアニャの力によるものなのだろうか。

たぶんそうなのだろう。アアニャの《眼》の力は誰より強い。帝都の《眼》と《耳》のすべてを塞ぐことくらい、アアニャの力を用いれば簡単なのだから。

ふと、不安になった。

いいのだろうか。

《眼》はイドローンの——帝都守護の要ではないのか。ひいては帝国全体の……。

「ユール。あなたが好き……」

六本の指のある小さな手がしがみつき、熱い息が耳元で囁く。

「ユール……もっと強く……強く抱いて……」

「アアニャ……俺のアアニャ……」

砂糖菓子のように甘く儂い抱擁に、すべての懸念は遠く彼方へと押しやられていった。



1章



月の光を浴びてシャナキヤスケルの町並みは蒼く冷え冷えと沈んでいた。

丸石敷きの細い坂道に焼殻漆喰やきがらしつくいの小さな家が建ち並ぶ下町は迷路の様相ようそうを呈し、不案内な者が迷い込んだら抜け出すのに半日はかかるだろう。路地歩きろぢ歩きの難しさに拍車をかけるのがどんづまりの存在だ。何百年に亘わたって増築を続けてきたこの街の道筋は複雑を極め、どこにも繋つながらない袋小路が多数存在していた。

どんづまりにはイローヴの木が一本だけ植えられてささやかな広場になっている所がある。そういつ

た場所は昼間はおかみさんたちの井戸端会議いどばたぎの場に、そして夜には城下を根城にする町猫たちの格好の集会場になっていた。

月明かりの下、庇伝ひさしづたいに猫たちが一匹、また一匹とイローヴの木の周りに集まってくる。

ひたひたと屋根を伝ってきた一匹の若い猫がどんづまりの広場へひらりと飛び降りた。この地域のボスである黒猫や、その他の白や斑ふちや虎縞とらこの古参の猫たちは顔を上げて鼻をひくつかせたが、さして注意を向けなかった。

古参の猫たちは他のことに気を取られていたのだ。神経質しんけいしつに尻尾しっぽの先を左右に揺らし、何もない宙の一点を見つめている。闇に光る視線の交わる場所で、空気がぎゅぎゅぎゅつ、と捻ねじれた。若い猫は逃げ出したくなったが、古参の猫たちが逃げないのでいつでも逃げ出せる体勢をとって踏み止まった。

捻じれは大きな渦うずとなり、やがてその中心に闇よりも黒い真つ暗な空間がぼっかりと口を開く。若い

猫は毛を逆立てて砂を撒くような威嚇の唸り声をあげた。これは異常なことだ。母猫に教わったことの中には、こんなことはなかった。

ぽっかり開いた黒い穴からぼん、と何かが跳び出してくる。

人間だ。

人間が、数珠繋ぎに手を繋いでぼん、ぼん、と次々に跳び出してくるのだ。古参の猫たちは唸るのを止め、宙の穴から突然に現れた人間たちを一心に見つめていた。若い猫もそれに倣う。

先頭を切って現れたのはまだ少年のように見える長身の若者だ。若者は月明かりに青く光る瞳で後ろを振り返った。

「全員無事か？」

「おう！ 皆いるぞ」

地響きのような大声で答えたのは金髪の大男だった。こういう人間の多くは乱暴だから注意しなければならぬ、と母猫に教わっていた。

「……これは……まあ何とも不思議な体験だね」

ポプラの木のようにひよろりとした青年だ。溜め息とともに手にした堅琴を愛おしげに撫でさする。詩人と呼ばれる種類の人間で、無害だ。毛皮を撫でたがり、食べ物を与えることもある。

「ぜひ歌にしたいけれど、難しそうだね」

つんのめるように跳び出してきた剽悍な赤毛の男が笑い半分に言う。

「うっひゃあ、おっかなかった！ 死ぬかと思つたぜ！」

並んで現れた小柄な白髪の少年が食つてかかる。

「何言つてんだよ、あんた初めてじゃないくせに……！ 死ぬかと思つたのは僕の方だ！ 上下が判

らなくてぐるぐる回つて……」

「けど、オレは最初のときのことはなーんも覚えてないからな」

「威張るなよ！」

「威張つてなんぞいないさ、イーアイ。おまえさん

が隣であんまり緊張してたもんで、ちょいとからかつてみたくなっただけさ」

「ガウアー、あんた、つくづく厭いやなヤツだな！」

青い眼の若者が笑う。

「とりあえず全員無事にシヤナキヤスケルに着いたことを喜んで欲しい。成功するかどうかは分からなかったのだから」

金髪の大男が言った。

「おまえはやれるとおふくろさまは言った。だから俺は心配しなかった」

「信頼してくれるのは嬉しいが、私自身が自分を信頼しかねていたのだから。付いてきたおまえたちは命知らずと言うべきだ」

「俺はおまえを信じる。だからおまえはもっと自分を信じろ」

そのとき、一行の中で一番小柄な黒髪くろかみの少女がきやあつ、と小さく声を上げた。

「どうした？　メル」

「足に何か触って……あ、猫！」

地域のボスである黒猫が少女の足にするりと身を寄せたのだ。往復して身体をこすりつけ、しなやかな尾でその足を軽く叩く。

「おまえ、いつも《ウトラの乳房》亭の前にいる猫だよね……？」

黒猫が肯定の意を表してニ、と鳴いた。

少女が腰をかがめて黒猫を撫でる。続いて古参の猫たちが次々に少女の足に身体を擦り寄すせた。

唐突とうとつに若い猫の小さな脳に自分もそうしたいという衝動が沸き起こった。母猫から教わったことのない衝動だった。母猫には、見知らぬ人間には用心しなければならぬと教わったのだった。

（行カナケレバ。挨拶あいさつシナケレバ）

突き動かされるままに若い猫は少女に駆け寄ってその足に身体を擦り付けた。

少女の手が優しく耳を搔く。若い猫はごろごろと喉のどを鳴らした。不思議な幸福感が湧いてくる。

（時満チルマデ待テ）

頭の中で何かが囁いた。時とはいつなのか、何を待つのか、若い猫には解らなかった。ただ幸福に満たされ、恍惚と小さな手の愛撫に身を任せた。

メルは詰めていた息を吐き出した。

回転して流れていく景色がびたりと一つに定まる。見覚えのある路地のどんづまりだ。

ホッとすると同時に、柔らかな何かが足に触れた。温かくて、ふわふわして、すべすべして、するするしたもの。それが行ったり来たりして脛に触れるのだ。

猫だ。シャナキヤスケルの町猫たちがまるでメルの到着を歓迎するように集まってそのしなやかな身体を足に擦り付けてくる。

「わあ！ あたしのこと、覚えててくれたの？ 良

い子！ 良い子！ よしよし……」

嬉しさと懐かしさで一杯になり、メルは猫たちを一匹ずつ撫で、抱き上げ、頬ずりした。前からよく知っている大きな黒猫や雉子猫もいるし、今年生まれて独り立ちしたばかりの若い猫もいる。

猫たちはひとしきり甘えるとてんでばらばらに路地に散っていった。誰に飼われるでもなく気ままに町で生きる『町猫』の呼び名にふさわしい。

イーアイが不満げに口を尖らせた。

「なんでメルばっか猫にもてるんだ？ 僕が触ろうとしたら逃げたぞ」

「だって、あたしはこの街の生まれだもん。猫たちとは顔なじみ」

シャナキヤスケルの町猫たちとメルはある意味で同郷の仲間なのだ。

深々と息を吸い込む。風が潮の香りを運んでくる。それに、魚を焼く匂いも。

本当にシャナキヤスケルに戻って来たんだ。

何もかも懐かしかった。イローヴの緑も、焼殻石灰の白壁も、足の裏に触れる石畳の丸石も。追われてこの街を逃げ出してから何か月かしか経ってはいない筈なのだけれど、こんなにも故郷の匂いに餓えていたなんて自分でも驚きだった。

物珍しげな顔をしてイーアイが辺りを見回す。

「へえ。シヤナキヤスケルってこういう街なんだ。

なんかイドローンと似てるな」

「街の基礎は帝国時代に遡るし、設計は帝国時代の街がお手本だから、自然と似たのね」

アラストリナが考え深げに言った。

「そうか。どっちも岩城を背にした城下町なんだ」

「そういうこと。そしてあれがわたしたちが奪還すべきシヤナキヤスケル城よ」

メルは月明かりの下、黒々と聳える岩山を振り返って仰ぎ見た。岩山の頂上には岩と一体となったシヤナキヤスケル城の塔城壁がくつきりとした影を夜空に刻んでいる。

あの城でトリナさまの父君は殺された。大公夫妻も。城は今も父君を殺した恐ろしいオルウイナ一派に占領されたままだ。生死の知れないトリナさまの二人の兄君は、まだ城のどこかに囚われているかもしれない。

戦って、取り戻さなきゃいけないんだ。そのために戻ってきたんだから。

ぶる、と身震いが出る。あの恐ろしい夏の夜以来あまりにいろんなことがあったから、自分が死ぬのはもうそんなに怖くなかった。けれど、人を殺めることになるかも知れないのが怖かった。相手は、ただ命令に従っているか、魔の奏楽に操られているだけかもしれないのだ。

ガウアーがぼん、と肩を叩いた。

「嬢ちゃん。今ごろ怖くなったのか？」

「ううん。怖くなんかないよ。あたしは跳ぶの三度目だからもう慣れたし」

「そっか。そいつは羨ましいな」

ガウアーが皓い歯を見せて笑った。

ソールは藁束わらたばのようにざっくりと短く髪を切り詰めたアラストリナを見つめている。

大抵のダルモリカ人男性より背が高いアラストリナは街中ではどうしても目立ってしまう。だが男ならばさほど目立たない。アラストリナより長身のルシアスとソールが同行するとなれば尚更だ。

「おまえが髪を切ってしまったのは残念だ」

「仕方がない。この国では、わたしは賞金首なのだから」

「分かってる。だが俺はおまえの美しい亜麻色あまいろの髪が好きだった」

「髪の長さなど美の本質とは何の関わりもないことだよ」

ルシアスが口を挟み、ソールはムツと見返した。

「では、本質は何なのだ？」

「そうだねえ。燃える氷か、流れる岩か……」

「なんだと？」

「よしなさい、ルシアス。ソールをからかうのは」

「別にからかつてはいないよ。美の本質は相反する性質の同居だと分かりやすく説明しようとしただけなんだけれど」

「まったくたいした分かりやすさね！」

「お褒ほめに預かつて光栄のいたり」

「褒めてないから。メル、いまあの魔法師の音楽が街のどこかで流れているか分かるかしら」

「はい！ 分かると思います！」

かもしれない、なんて仮定の話が怖がっていたら何も出来なくなってしまう。

まず、自分に出来ることをしよう。

メルは神経を集中して《耳》を澄ました。

聴こえてくる。

街中のさまざまな《声》が聴こえてくる。風のような囁き声、口に出された、或いは出されなかった無数の小さな呟つぶやき。どこの誰とも判らない断片的な《声》が一斉いっせいにに頭の中に響き渡る。

これでは駄目だ。魔法の音に意識を絞ろう——

頭を少し傾け、魔弦の《音》だけを聴くように意識した。聴こえない。あの恐ろしい音は。

「……今はどこにも流れてないです。音として聴こえる範囲にも、その外にも」

張りつめていた皆の表情が緩んだ。

あの魔法師の魔弦の音は、聴いている人間を操り人形にしてしまう。自分とアラストリナは影響されないけれど、他の四人はどうなるか分からない。

「では、『青海月楼』へ」

「おや。遊廊とは嬉しいね」

ルシアスがへらへらとした調子で言い、ソールが鼻に皺を寄せた。

「おまえは嬉しいかもしれないが、俺は女の愛を金で買うような悪所は好かん」

「買うとは言っていない。僕は花の美を愛でたいだけだよ。美は歌の源泉だからね。花を摘み取るような無粋な真似はしないよ」

「同じことだ」

二人の言い争いにイーアイが口を挟んだ。

「全く！ 二人とも何を言ってるんだよ。ソールもルシアスも金で女を買う必要なんかないじゃないか。背が高い男は女にもてるんだ。いくつになっても子供みたいで髭も生えない《帝国の裔》をともに相手にしてくれる女なんかいやしない」

恨めしげにそう言うってから、慌てて言い添えた。

「けど、だからってぼくは女を金で買ったりはしないけどさ」

ガウアーが横から口を挟む。

「安心しろ。誰もおまえが女を買うとは思ってないからさ」

「それはそれで失礼だよ！ こう見えても僕だって成人男子なんだぞ！」

メルはどうしてこの三人は付いてきたのだろうと訝しんだ。

ガウアーは分かる。シャナキヤスケルの生まれだ

し、アラストリナの側にいることで遺物^{いぶつ}捜しで受けた獣化^{のろ}の呪いが緩和されると考えているからだ。

だけど、ソールとイーアイとルシアスは何で付いてきたんだろうか。特にルシアスは分らない。

そんなことを考えながら先頭に立つて通りへ出ようとしたとき、四、五人の豪士が歩いてくるのが目に飛び込んできた。夜目にも目立つ金の紋章^{もんしょう}の入った揃い^{そろ}のお仕着せを着ている。

あのお仕着せ……クロノードの郎党^{ろうどう}だ……！

既に酒が入っているらしく、道幅いっぱい^{はば}に広がって辺り憚^{はば}らぬ大声を立てて笑い、がなり合っている。一人がメルたちに気付いた。

「貴様ら、こんな時間に何をしている？」

「別に怪しいものではないです……」

「怪しいか怪しくないかはこちらが決める。まず通行札を見せてみる」

「通行札って何ですか？　ここは関所じゃなくて普通の道じゃないですか」

「札を持っていないのか？　さては通行料を納めず日が暮れてこそそこそ出歩く輩^{やから}か」

札？　通行料？　いつたい何のこと……？

「ちよつとそこまで来てもらおうか」

言うや否や、家来衆はいきなりメルの腕をつかんだ。

「何をするんですか！　あたしたちは何もしてません！」

「それがいかんというのだ！　通行札も持たずに往來を歩いていると思っておるのか？」

「だからそれはなんですか！」

ここは天下の往來だ。生まれた時からシヤナキヤスケルに住んでいたけど、道を歩くのにお金が必要だなんて莫迦^{ばか}な話は聞いたことがない。街を離れていた何か月かの間にそんなことになったのだろうか？

「おう、何の言いがかりだ。その子を放せ！」

ソールが雷のような声で怒鳴る。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。